【土木史研究　第10号　1990年6月　審査付論文】

江戸における広場的空間の特性と変遷に関する研究

鹿島建設㈱　正会員　清水　教行

東京工業大学教授　正会員　渡辺　貴介

A Study on the Charcteristics and the Transformation of so-called "Plaza" in Edo City

by Noriyuki Shimizu
Takasuke Watanabe

ABSTRUCT

This study is intended to find out the characteristics and the transformations of "Plaza" in Edo City. For this purpose, the macroscopic distribution and the transformation of "plaza" derived from "Kiriezu" and maps of old Edo City were toporographically examined and the site characteristics of "Plaza" were analysed. Besides, the functions of "Plaza" were analized and classified. The result of this study are as follows.

(1)"Plaza"in Edo City were located on several types of "Fuchi" (fringe,edge) such as riverside and interface.

(2)Those "Plaza" functioned as open space not only for fire prevention but also for transportation,and communication---etc.

【 ※ キーワード：広場的空間・縁の広場・多様な都市的機能 】

1．はじめに

(1)研究の対象と目的

日本において広場という言葉が使われ始めたのがいつ頃からであるかは定かではないが、1603-4年の日葡辞書[1]では、日本語 " 広場＝FIROBA " に対して、ポルトガル語" luger lergo " （広い場所の意）を当てており、少なくとも江戸初期には日本語に広場という言葉が存在していた。

江戸の町のどのようなオープンスペースをさして " FIROBA " を同定していたのかは必ずしも明かではないが、江戸の町を描写した名所風俗画や諸文献が示すところによれば、会所地・火除地・河岸・見附・馬場・社寺境内や、江戸辺縁部における飛鳥山・御殿山等の名所遊山地には、人々が比較的自由に群集し、或いは、自由な行動が楽しめるようなオープンスペースが数多く存在していたと見受けられる。

本研究では、こうした人々が自由に群集しえるオープンスペースのうち、江戸の町の市街地（都市的土地利用）の中に存在していたものを、まちの中の広場的空間と呼ぶことにする。具体的には、表－1に示すオープンスペースのうち、道路、会所地・社寺境内・遊山地を除くものを、本研究の対象とするものとし、本研究では、これらを総称して広場的空間[2]と称する。

従来江戸の町の広場的空間に関する研究[3]は、専ら火除地等の明地から広場への成立過程を中心に論究しており、そうした広場的空間の江戸の町における分布や立地への着目に欠けていたと考えられる。

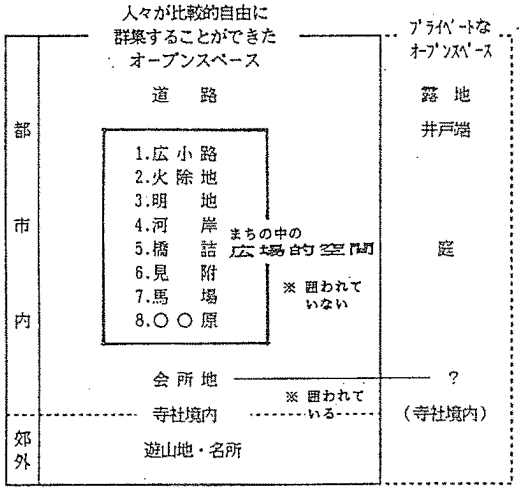
そこで本研究は、広場的空間のマクロな分布特性・ミクロな立地特性・果たした機能等を分析する意味から、以下の3点を目的とする。

① 江戸における広場的空間群の分布と変遷を明らかにすること。

② 江戸における広場的空間の立地特性等を明らかにすること。

③ ①・②で扱った広場的空間のうち江戸後期に名所

表－1　研究の対象（本研究における広場的空間）



注）本研究の対象とする広場的空間
① 江戸の都市的土地利用内（まちの中）である。
② 人々が比較的自由に群集することができたオープンスペースである。
③ 周囲を塀などで囲われていない空間である。
④ 一般的な名称で言えば、上表の1～8が該当する。

化していたものを対象として、それらが果たした機能、及び機能と立地特性との関係を明らかにすること。

(2)研究の方法

まず、2（次節）では、まず絵図・地図による視覚的な面から、広場的空間の抽出及び分析を行う。この項は、江戸全体といったマクロなスケールでの広場的空間群の分布特性及びその変遷の把握を行う。（研究の目的①に対応する。）

続いて3では、2で抽出した個々の広場的空間を対象として、周辺の事物・土地利用・自然地形等との関連に着目しつつ、ミクロな立地特性を分析し、属性の抽出及びそれらの分類を提示する。（研究の目的②に対応する。）

4においては、江戸名所図会・絵本江戸土産等にみられる名所化された広場的空間を対象として、それらの機能についての抽出・分類を試み、抽出した機能と3で明らかにしたフィジカルな立地特性との関連を分析する。（研究の目的③に対応する。）

2．江戸における広場的空間の分布および変遷

(1)広場的空間の抽出の方法

ここでは地図・絵図により視覚的に広場的空間を抽出し、読み取れる情報を併せて抽出した。一般に江戸絵図は、描線の曖昧さおよび情報の不足等がつきまとう。そこで、本研究では江戸期の町割りを残しつつ、精度の点でも比較的信頼性が高い[4]と考えられる明治東京全図（縮尺1/5000）を用いて、区画等の情報をたよりに、広場的空間を絵図からこの図へ転写した。（使用したデータについては巻末を参照）そして、この図から広場的空間の面積を計測し、位置・形状の把握についても正確を期するように努めた。ただし、江戸初期については、絵図が非常に曖昧なので明治9年図への転写は行わない。

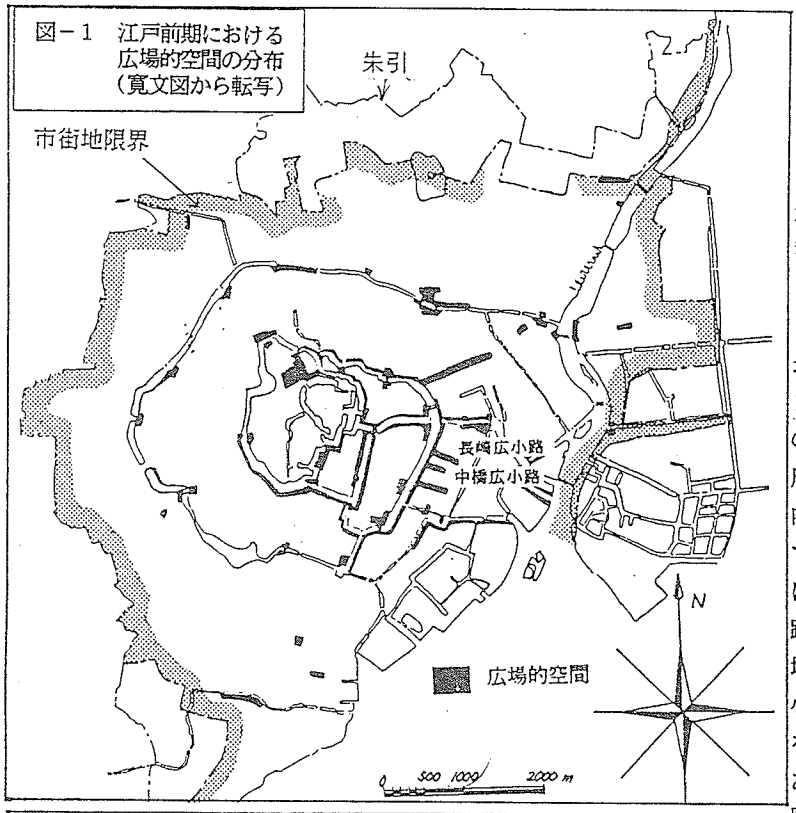
朱引内でも田畑が混在する場所は江戸郊外と考え、その内側の市街化された区域内を対象に広場的空間を抽出した。抽出した広場的空間は、①区画自体が空地であるもの、②街路が周囲と比較して著しく広くなっているのが地図上から明確に判別できるもの、③水路際において幅員およそ10間（20m）程度以上のもの（特に①②に重複しないものを河岸空間と呼ぶ）である。ただし、馬場・的場・見附・番所など広場的空間と関連が深いと思われる施設[5]は広場的空間内に含めて抽出するものする。

(2)江戸初期の広場的空間の特徴（1632年、寛永9年）

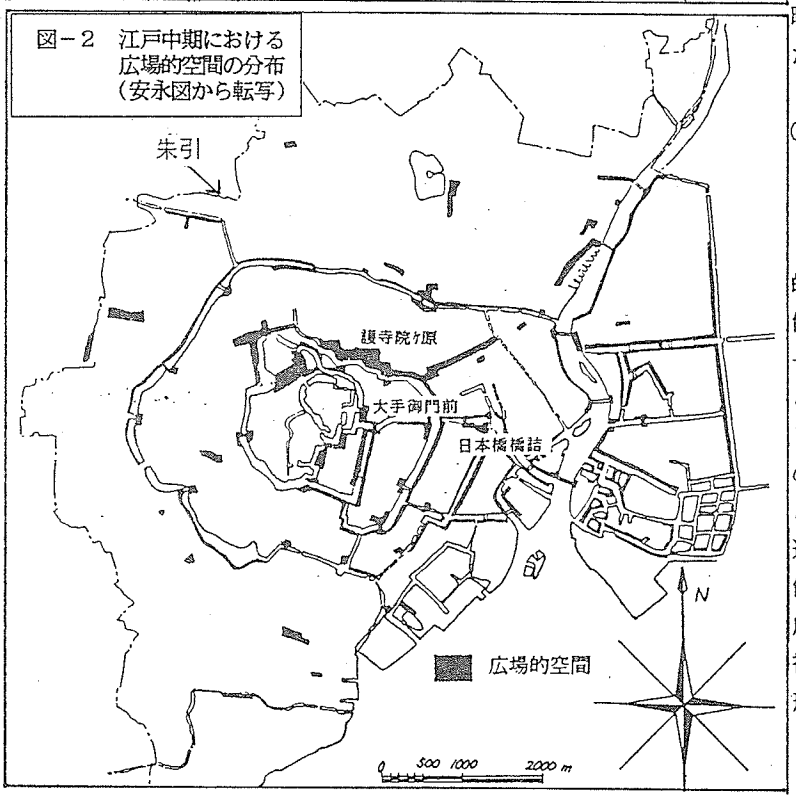
明暦の大火以前は残存している資料が極端に乏しい。この時期において参照すべき絵図としては武州豊嶋郡江戸之庄図がある。この図によれば、形成されている広場的空間はまだ少ないが、大手門前・見附内などの江戸城郭内には広場的空間が既に存在している。一方、水路際は、日本橋・京橋周辺の町人地においては空地として担保されており、逆に江戸城周辺の武家地では水路際が建蔽空間化されているところが多い。尚、本研究では対象としなかったが、会所地[6]は、江戸期のオープンスペースとしては特筆すべき空間であり、江戸城南東の町人地において、周囲を町屋に囲まれた空間が、明確に読み取れる。

(3)江戸前期の広場的空間の特徴（1657年、1670～73年）

明暦の大火直後の明暦図、および寛文図の2時点は時期的には近いが、明暦の大火以降の復興期で江戸の大改造が行われた時期であり、かつ人口データで見ても江戸が飛躍的な成長を続けている時期である。



図－1　江戸前期における広場的空間の分布（寛文図から転写）



図－2　江戸中期における広場的空間の分布（安永図から転写）

①明暦図の広場的空間

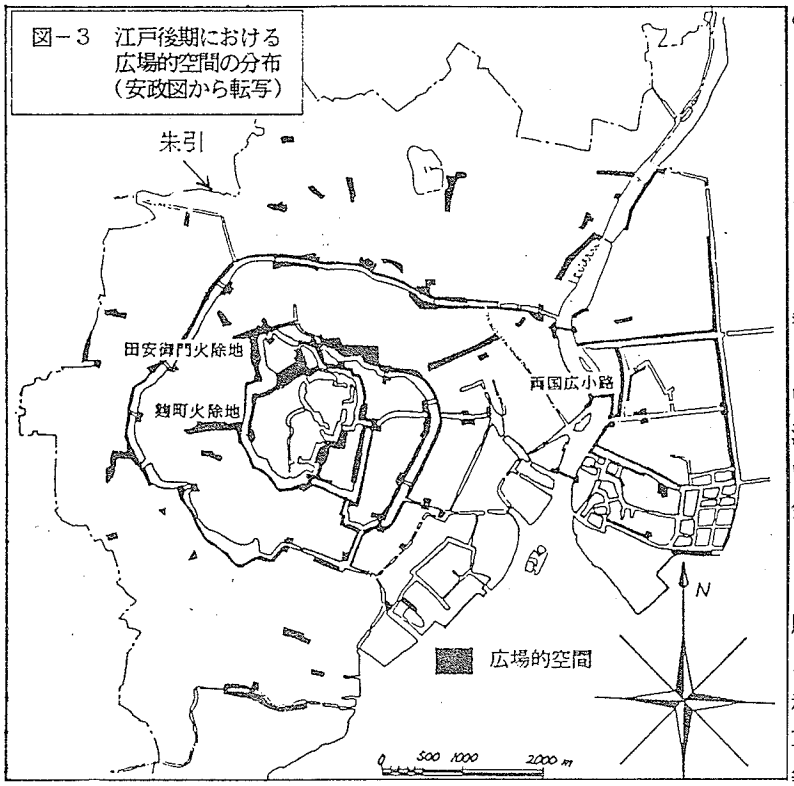
（1657年、明暦3年）

明暦図における河岸空間を除く広場的空間の抽出数は47箇所で、面積は合計値は50ha、平均が1.1haであり、河岸空間の総面積は45haである。市街化区域はまだ朱引から大きく内側へ下がっており、隅田川以東、神田川北、および西側の市街地化もあまり進んでいない。広場的空間の形成もまだ少ないが、見附の周囲特に江戸内堀内および見附内の広場的空間はほぼ形成されている。また、日本橋から京橋にかけての町人地に大工町広小路および長崎広小路の2つの火除地が形成されている。大工町広小路が、引込堀であったところを埋め立てて形成されたものであるのに対して、長崎広小路は、町人地の撤去によって形成されたものである。

②寛文図の広場的空間

（1670～73、寛文10～13年）

寛文図による抽出結果を図－1に示す。河岸空間を除く広場的空間の抽出数は62箇所で合計値は85ha、平均値が1.4haであり、一方の河岸空間の総面積は51haと市街地拡張にともなって増加している。明暦図から15年程度の短い期間としては大きな変化といえよう。明暦図における先述の2つの火除地に加え、中橋北側の引込堀を埋め立てて、中橋広小路が形成されている。また、神田においては神田八講明地が形成されている。



図－3　江戸後期における広場的空間の分布（安政図から転写）

(4)江戸中期の広場的空間の特徴（1779年、安永8年）

安永図による抽出結果を図－2に示す。河岸空間を除く広場的空間の抽出数は88箇所で合計値137ha、平均値が1.6haである。この時期になると江戸の市街化区域はほぼ朱引に達しており、河岸空間も市街地拡張にともない深川周辺等が大幅に増え、82haとなった。注目すべきは、護持院ヶ原、田安御門火除地など城北に大規模な広場的空間が形成されていることである。逆に、寛文図では大きく目立っていた中橋広小路・長崎広小路・大工町広小路は町屋となって消滅しており、神田八講明地は中央に舟運路が通り水際の広場的空間に変化している。

(5)江戸後期の広場的空間の特徴（1859年、安政6年）

安政図による抽出結果を図－3に示す。河岸空間を除く広場的空間の抽出数は104箇所で合計値148ha、平均値1.4haである。また、河岸空間は、蔵地化したものがあり、79haとなった。大きな変化としては、城西に麹町火除地が設置されたこと、江戸中期頃に市街地が拡張した外縁の地域において小規模な広場的空間が多く設置されこと、以前からある広場的空間の多くは面積が減少していることが挙げられる。

(6)江戸防火線との関係[7]

広場的空間の防火線的位置は、江戸城の防火に主眼が置かれており、まず堀およびその堀端の河岸空間によって江戸城を取り巻き、各橋詰（見附）を補うようにして広場的空間が存在している。また、大規模な火除地は江戸城北方に集中的に分布している。これは、江戸の大火は圧倒的に冬季に多く、かつ北ないし北西を火元としていることから、明暦の大火を教訓に、季節風による延焼に備えたものと考えられる。また、御三家等の大規模藩邸、寛永寺・増上寺・浅草寺等の大規模社寺、湯島聖堂等の重要建造物、浅草御米蔵等の物流上重要な蔵・湊などの周囲にも広場的空間が存在している。これらの大規模な藩邸・社寺などは、それ自体が江戸城の防火線を担保していると言えるが、付帯する広場的空間は、これらの重要建造物に対する防火意図とも考えられる。

3．江戸における広場的空間の特性の抽出

(1)本節のスタンス

3では、2で抽出された個々の広場的空間を対象として、地図・絵図から読み取れるより詳細な情報を参照し、周囲の建造物・用途・自然地形との関係に着目することにより、よりミクロな立地特性を分析し、各々の広場的空間が持つ属性の類型化を試みる。

具体的な着眼点は、見附門のような関連した施設、武家地・町人地・寺社地といった周囲の用途、周囲の重要（大規模）建造物・重要機関との関係、広幅員道路との関連、水路との関連等である。

(2)江戸の町の地域階層境界（結界）との関係

江戸の町は江戸城を中心に、内堀内－内堀外・外

堀内－外堀外といった地域空間の階層が存在し、それらの境界には見附御門によって境界づけられ、内・外という概念が存在したと考えられる。こういった、堀によって分けられた地域階層の境界を結界と呼ぶこととし、見附内外および江戸城前に立地する広場的空間は、こういった結界を示す門によって特徴づけられていることから門型と名付ける。見附内・見附外に立地する広場的空間はそれぞれ23箇所・13箇所で、見附内には必ず広場的空間が設けられ、面積も一定しているのに対し、見附外は、存在しない場合、田安御門外のように大規模である場合など多様である。

(3)用途地域との関係

広場的空間の多くは、用途境界に立地している。武家地と町人地の用途境界に立地しているものは、麹町火除地・采女ヶ原・神田筋違御門前など非常に多い。また、寺社地と町人地の用途境界にも多く、浅草寺雷門前などの寺社門前立地のものがこれに含まれる。武家地と寺社地の用途境界、大規模区画の武家地と小規模区画の武家地の用途境界も前二者よりは少ないが存在する。これらの広場的空間を用途境界型と名付ける。

一方、周囲の用途・ロットとも一定したものとして、中橋広小路・四日市広小路・長崎広小路・神田八講明地は町人地を分断するように立地していることから町人地内中央型、市ヶ谷武家地内・小日向武家地内・ハンの木木馬場は小規模区画の武家地内に立地していることから小規模区画中央型と名付ける。前者は明暦の大火直後寛文期までに成立し、江戸中期には既に消滅している。後者は江戸中期以降に現れたもので、馬場を中心とした小規模な広場的空間である。

(4)重要（大規模）建造物・重要機関との関係

防火線の項でも示したように、御三家等の大規模藩邸・大規模な寺社などの重要（大規模）建造物に付随しているもの、奉行所・定火消などの重要機関に付随して立地している広場的空間も多い。抽出総数110箇所に対し、重要建造物付随が35箇所、重要機関付随が16箇所である。

広場的空間が付随する重要建造物としては、尾張・紀伊・水戸・田安・松平邸などの大規模藩邸（特に上屋敷に多い）、寛永寺・増上寺・浅草寺などの大規模寺社があり、寺社では特にその門前に多く立地している。これらを、重要（大規模）建造物付随型と名付ける。尚、特に、増上寺・寛永寺・浅草寺等の、寺社門前に立地している広場的空間はその殆んどの場合、面的な広がりを持った寺社地を形成しており、寺社地と武家地あるいは町人地の用途境界型の性質をを兼ね備えている。同様に大規模な大名屋敷に付随する広場的空間も武家地と町人地の用途境界型の性質を兼ね備える場合が多い。

また、重要機関としては、南北の町奉行所・定火消・湯島聖堂・御用屋敷・勘定奉行屋敷・浅草の御蔵前・各種御番所（蔵番所・水番所）・歩兵屯所などが挙げられる。これらを重要機関付随型と名付ける。この中で、歩兵屯所および定火消の場合は、他の場合と違い、広場的空間が先に存在し、そこの屯集上の利用価値が誘因となって、機能が後から周辺の土地利用を変化させて立地した事例である。

上記の重要建造物付随型と重要機関付随型は、どちらも重要な建造物に付随した形で門前立地しているという特徴を持つ。これを、特に(2)で述べた門型と区別して、前型と名付ける。

(5)広幅員街路との関係

河岸空間を除く広場的空間の抽出総数110箇所に対し、広幅員街路と関係するものは16箇所とかなり少ない。形状を見るといわゆるヘビが卵を飲んだ形で端路部に広場的空間が立地しているものが圧倒的に多く、いわゆる西洋の近代的広場の様に複数の広幅員街路の交差部に広場が立地している例は極めて少ない。唯一の例外と言えるものが神田筋違御門前であり、半円状の広場的空間に複数の通路が取り付いている。

(6)水路との関係

河岸空間を除く広場的空間の抽出総数110箇所に対し何らかの形で水路と接しているものは86箇所もあり、水路との関係が密接である様子が窺える。その中で橋詰に立地するものも見附が36箇所、それ以外が27箇所で合わせて63箇所とかなりの数にのぼる。また、駒形堂前や源森橋橋詰など渡し場が設置され

表－2　広場的空間の特性の分類

大分類	中分類	性質	小分類（備考※）	該当数	広場的空間の具体例
縁型	門型	「結界の縁」（地域階層の境界）に立地	江戸城前型	2	大手御門前・坂下御門前
			見附内型	23	神田筋違橋御門内・常盤橋御門内
			見附外型	13	桜田御門外・田安御門外火除地
	用途境界型	「用途地域の縁」に立地	武家地と町人地の縁	25	麹町火除地・采女ヶ原
			町人地と寺社地の縁（寺社門前型）	10	浅草寺雷門前広小路・下谷広小路
			寺社地と武家地の縁	5	増上寺御成門前・梅窓院脇
			大規模区画と小規模区画の縁（武家地）	2	相良邸前・小石川武家地内
	水陸境界型	「水陸の縁」に立地	橋詰型	63	両国広小路・江戸橋広小路・日本橋橋詰
			水際型	86	鎌倉河岸・柳原堤・溜池畔
	前型	重要建造物や重要機関に付随立地（門前立地型）	重要建造物付随型	35	紀州邸前・水戸邸前・湯島聖堂前
			重要機関付随型	16	南北町奉行所前・定火消前
中央型	町人地内中央型	集積型町人地を横断して立地	※江戸初期に形成、江戸中期には消滅	4	中橋広小路・四日市広小路 長崎広小路・神田八講明地
	小規模区画武家地内中央型	小規模区画の武家地の中に立地（馬場型）	※江戸後期に現れ、必ず馬場が付随、小規模なもの	3	市ヶ谷武家地内・小日向武家地内 ハンノ木馬場

注）該当数は江戸機を通じての数で、面積は最盛期のもの（最大面積）の合計とした。

ているものもある。これらのことから、江戸の広場的空間は、街路とではなく水路とセットで考えられ存在していたと言えよう。

水路際に立地している広場的空間は、水と陸の境界に立地していることから、水陸境界型と名付ける。水陸境界型は更に、橋詰に立地しているもの（いわゆる橋詰広場）と、単に水路際に立地しているものに分類し、前者を橋詰型、後者を水際型と呼ぶことにする。

(7)広場的空間と縁

(2)～(6)の考察をまとめると、地域階層境界（結界）との関連から門型、用途境界との関連から用途境界型・町人地内中央型・小規模区画武家地内中央型、水路との関連から水陸境界型という類型が抽出された。これらは表－2の中分類に示されるが、以下は、縁（後述：都市におけるある種のエッジ的なもの）という性質に着目して更に考察を進める。

表－2の中分類うち、門型・用途境界型・水陸境界型は、江戸という都市におけるある種のエッジ（境界）的なものに関連して立地している。門型は、堀という地域階層を分ける結界というエッジに付随して立地しており、水陸境界型も水路というエッジに付随、用途境界型も、武家地と町人地の境界というある種のエッジ的なものに付随していると考えられる。このような、エッジ（境界）を縁と呼ぶことにし、これに付随した広場的空間を縁型と名付けることにする。

縁型の広場的空間が、縁に付随して立地している意味で、ある種の方向性を持っているのに対し、町人地内中央型や小規模区画武家地内中央型は、無指向的な広場的空間である。よってこの2つを、縁型と区別して、中央型と名付ける。

前型の広場的空間は、重要建造物・重要機関に付随するものであり、無指向的な中央型とは異なり、大規模な藩邸の塀や寺社の堀といった縁的な性質なもの付随して立地しているものと、定火消し前の広場のように無指向的なものとがあり、縁型・中央型の範疇から外して考えるのが妥当であろう。

(8)広場的空間の特性の分類

以上の考察の結果、広場的空間は空間的位置特性から表－1のように分類した。大別して、同一用途内の中央型と、境界部に立地する縁型に分けられ、大部分が縁型に属していることが読み取れる。また、中央型を代表する町人地中央型の広場的空間も、防火線としての特性等から区画を分断するように立地していることから、一般に連想されるいわゆる欧米型の求心性の強い広場とは性格が大きく異なり、こ

の意味では縁型の性質をも併せ持っているといえる。

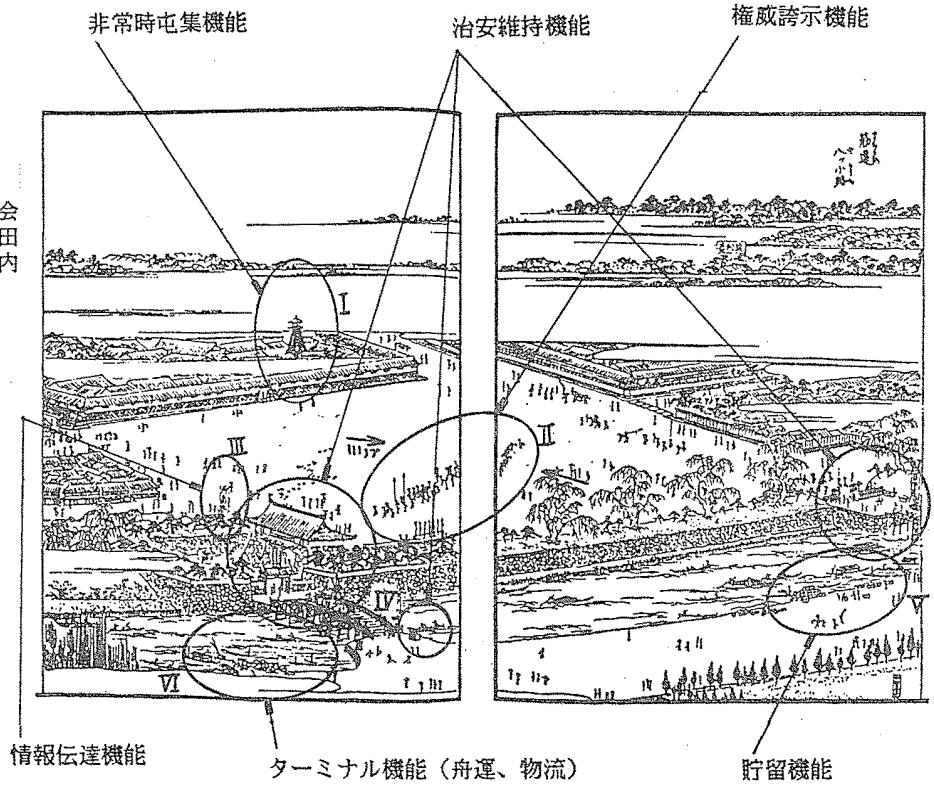
また、縁型は、結界・用途地域・重要建造物・交通路・自然地形との関連で分類しているが、大規模建造物や自然地形的な縁に立地する広場的空間は用途境界の縁もまたぐように立地している場合が多い。結界の縁である見附の場合についても同様であり、かなり多くの広場的空間は、用途境界という単一の概念でも説明することができる。

4．代表的な広場的空間の機能

(1)広場的空間の機能の抽出

広場的空間がどのように使われてきたかを江戸名所図会・絵本江戸土産等の絵図および文献により調べ、広場的空間の機能を抽出する。広場的空間の利用は江戸期の中期以降から盛んになっていったことが諸文献より知られ、また名所化した広場的空間は特徴的な利用がなされているという観点も併せて考え、天保期の江戸名所図会に掲載されてる20箇所を対象として分析を行う。[9]

図－4は神田筋違御門内および御門外の2つの広場的空間（御門内の広場的空間が図の奥の方）における江戸名所図会からの機能の抽出の例であり、絵図から機能を読み取っていく過程を説明すると、まず、御門内の空間の傍らに火見櫓(Ⅰ)が設置されている様子から非常時屯集機能が読み取れる。また、大名行列(Ⅱ)が中央を横切り見附門に向かって行く様子が広場的空間によって行列が強調され、それを囲むように見物の人々が描かれている様子から、権力誇示の機能、および見ている人々にとってのショー的機能（屋外）が読み取れる。高札(Ⅲ)からは情報伝達機能、見附門および番所(Ⅳ)の立地している様子からは治安維持機能が読み取れる。一方、御門外の空間に目を移すと、堀端に荷が積み上げている様子(Ⅴ)から貯留機能、橋詰の船着場の様子(Ⅵ)から物流における舟運のターミナル機能が読み取れる。また、この図には記されていないが、絵本江戸土産では、高札のたもとにヨシズ張りの水茶屋が描かれ、それぞれから情報伝達機能と盛場的商業機能をも読み取ることができる。以上のような方法で広場的空間20カ



図－4
広場的空間の機能の抽出例（江戸名所図会における神田筋違橋御門内外の事例）

表－3　江戸名所図会等から抽出した代表的な広場的空間の機能

	機能		根拠となる要素	広場的空間の例	該当数	広場的空間の対応																
						1.常盤橋御門内	2.常盤橋御門外	3.神田筋違橋御門内	4.神田筋違橋御門外	5.呉服御門内	6.呉服御門外	7.栗原ヶ丘	8.馬喰町馬場	9.薬原堤	10.護持院ヶ原	11.湯島坂	12.増上寺門前	13.浅草門前	14.下谷広小路	15.山下広小路	16.日本橋橋詰	17.両国広小路	18.新大橋広小路	19.永代橋広小路	20.江戸橋広小路
1.	お上御用達機能	非常時屯集機能	火見櫓の付帯立地している様子	馬喰町馬場	7/20		A	A		A		A											
		治安維持機能	見附門・番所に番人が駐在している様子	神田筋違御門内		A	A	A	A	A													
		権威誇示機能	見附門の立地、大名行列を誇張している様子	神田筋違御門内				A				A						A					
2.	交通・運輸機能	ターミナル機能　人－陸上	大八車の集結・駐留している様子	薬原堤	9/20															A			
		ターミナル機能　人－水運	船着場と荷の積み下しの様子	江戸橋広小路									A						A	A	A	A	A
		貯留機能	物資の貯留の様子	神田筋違御門外			A		A		A			A							A		
		ターミナル機能　物流－陸上	「諸方の行程もこの所より定めしむ」	日本橋橋詰										A									
		ターミナル機能　物流－水運	「船宿あり…江戸の内諸方への舟場なり」	江戸橋広小路					A											A	A		
3.	商業機能	周囲立地	店舗が周囲を回むように立地	馬喰町馬場				B					A					A		A	A	A			
		市場	「東の化し…魚家ありて日毎に市を立つる」	日本橋橋詰																A	A				A
		盛場的なもの	「びいどろ細工・長命丸」（根無草）	両国広小路				B				A	A					A				A			
		レクリエーション的なもの	茶屋から隅田川を眺めている様子	新大橋広小路																		A	A		
4.	交流・交歓機能	祭祀機能	祠と参拝する人々	薬原堤	12/20									A							A		A	
		情報伝達機能	高札に集まる人々	日本橋橋詰				A										A		A	A			
		馬術等の機能	馬場を楽しむ人々	栗女原								A	A				A							
		公園的機能	木陰に腰掛けを出してくつろぐ人々	護持院ヶ原											B	A								
		ショー的機能　屋内	仮設店舗内の興行の様子	山下広小路								A							A		A			
		ショー的機能　屋外	花火とそれを見る群衆	両国広小路				A				A	A				A				A			
		交流機能	多様な階層の群衆の様子	栗女原								A	A					A		A	A	A			
		都市連帯感育成の機能	流行・時節行為等による知識・行動の共有	両国広小路																		C			

注）根拠となった文献 … A：江戸名所図会　B：絵本江戸土産　C：根無草

所の機能の抽出を行った結果を表－3に示す。尚、この表に示してある機能は下に行くほど、都市的なものとなっている。表で抽出した機能の他に、防火線機能・緩衝機能、建蔽空間への転用のポテンシャルとしての弾力的余地機能、排水機能などは、当然全ての広場的空間に存在すると考え、表からは除外した。また、広場的空間における活動が詳細に記述されている根無草・市井年表[10]からは、主として多様な階層間の人々の直接的接触、流行・時節行為などによる知識と行動の共有、異質なものとの接触などが読み取れ、都市連帯感の育成機能ともいうべき機能を引き出すことができる。

尚、表－3は限定された資料に基づいた広場的空間の機能の抽出例であって必ずしも網羅性は問い難い。むしろ、江戸の定番ガイドブックともいうべき江戸名所図会を中心とした、オリジナルで信頼性が高い資料からの抽出結果として、都市的な規模の広場的空間が有していた代表的機能が最低限でもこれだけ存在していたと考えるのが妥当な解釈といえる。

さて、表－3に抽出した機能は、「お上御用達機能」・「交通・運輸機能」・「商業機能」・「

表－4　広場的空間の特性と機能の対応

フィジカルな特性（表－2）に関連した項目					機能（表－3）に関連した項目				
フィジカルな分類項目				該当数 110箇所中	該当数 20箇所中	機能の大分類			
大分類	中分類	小分類				1.	2.	3.	4.
縁型	門型	江戸城前型		2	0	0	0	0	0
		見附内型		23	3	3	0	1	1
		見附外型		13	3	3	3	0	0
	用途境界型	武家地と町人地の縁		25	5	3	4	3	3
		町人地と寺社地の縁		10	4	3	0	4	4
		寺社地と武家地の縁		5	0	0	0	0	0
		大規模区画武家地と小規模区画武家地の縁		2	0	0	0	0	0
	水陸境界型	橋詰型		63	11	6	8	6	5
		水際型		86	15	6	9	5	8
	前型	重要建造物付随型		35	4	0	0	2	3
		重要機関付随型		16	1	1	0	0	0
中央型	町人地内中央型			4	0	0	0	0	0
	小規模区画武家地内中央型			3	0	0	0	0	0

交流・交歓機能」と大きく4つに分類できるが、この表の該当数を見ると、商業機能やショー的機能・交流機能をもつ広場的空間の該当数が多く、いわゆる広場の本源的な機能の一つである市民意識の醸成の場が江戸の町にも少なからず形成されていたと考えることができる。

(2)広場的空間の特性と機能の関連

先に３節（表－２）で求めた広場的空間のフィジカルな特性からみた分類と、前項で抽出した広場的空間の機能の分類との対応関係を示したものが、表－４であり、表中の１～４は表－３の大分類の項目を示している。フィジカルな特性における該当数と本節で用いている名所化された広場的空間の数を比べると、中央型は全く名所化しておらず、武家地と町人地の縁、寺社地と町人地の縁など、用途境界の縁に立地する広場的空間が名所化する比率が高く、用途境界の立地特性が多様な広場的機能を獲得し易い性質であると考えられる。

全体的に眺めると、江戸城周辺の門型の空間は一般にフォーマルな機能を持つのに対し、用途境界型や水陸境界型は、先に挙げた詳細文献を見てもインフォーマル、アジール的な、多様な都市的機能を獲得しており、その地理的中間に立地する見附御門外の空間は両者の機能を少しづつ併せ持ち、機能的にも中間的な存在となっている。また、采女ヶ原の例のように武家地－町人地の用途境界に立地して両者のフィルター的な要素を持ちつつも、多様な階層が群集して異なった階層間の交流の場となっている事などから、縁型の広場的空間（縁の広場）は、いわゆる欧米的な求心性の強い広場と比肩しうる機能的要素を持ちつつも、内容的には異質な、縁独特の性質を備えていたことが窺える。

５．まとめ

①江戸における広場的空間群の地図上の位置・面積等の分布状況を、明暦、寛文、安永、安政の4時点について明示し、その分布の特徴と変遷を明らかにした。

②江戸における広場的空間は、そのフィジカルな立地特性から町人地中央型等の中央型と、用途の境界等に立地する縁型（縁の広場）とに分類され、細かくは13タイプの属性が抽出された。そして大部分は縁型に属し、中でも用途境界型・水陸境界型等の属性を持つものが多く、後者が示すように江戸における広場的空間は街路ではなく水路とセットで存在していた。

③江戸名所図会等から抽出された江戸における代表的な広場的空間の機能は、お上御用達、交通・運輸、商業、交流・交歓の4つの機能に大別され、細かくは20タイプの属性が抽出された。これらの機能は、立地特性における中央型の広場的空間には全く見られず、縁型にのみ現れた。そのうち、門型はフォーマルな機能を持っていたのに対し、用途境界型・水陸境界型は多様な都市的機能を獲得していた。

最後に、この場を借りて、本研究に多くのご指導・ご鞭撻を頂いた天野光一氏に感謝の意を表します。

《補　注》

(1)日葡辞書では、「FIROBAに出つけた人」が「人前に出ることに慣れた人」と掲載されている。一方、絵本江戸土産[14]の鎌倉河岸の景では、「豊島やにて白酒ひさぐのときは、さしもの広場も人の山をなす。これまた江戸の名物なるべし」とある。

(2)広場に関連して新語を定義した先行研究は多く、場所的広場が加藤論文[11]、自由空間が鳴海論文[12]において、提唱されている。

(3)注目すべき先行研究として、下記の参考文献における10)渡辺、11)加藤、12)鳴海の研究が挙げられる。

(4)江戸－東京市街地図集成[2)-6)]に付記されている解説によれば、明治東京全図[7)]は比較的信頼性が高い。使用した絵図では、寛文図[3)]が精度が高いのに対し、明暦図[1)]・安永図[4)]・安政図[5)]はかなり歪みが大きく、武州豊島郡江戸之庄図[2)]は更に曖昧である。尚、本文中の江戸前記～後期の広場的空間の抽出に使用した絵図1)～6)及び明治東京全図は編者である地図資料編纂協会によって、正規な1/5000図に極力補正された復刻版を用いた。尚、江戸切絵図は、傍証として用いた以外に、文字情報が豊富な点で大いに役立った。

(5)これら馬場等の施設及びその周辺の空間をもって広場的空間とする。

(6)会所地については、、伊藤[19)]、玉井[20)]、内藤[21)]など扱っている文献が多く、江戸城東南部尾の町人地において、周囲を町屋に囲まれた標準60間四方の空間と言われるが、不明な点が多い。参考までに明暦の大火以降に本研究で参照した絵図では、明暦図[1)]では半数以上が巷所化、寛文図[3)]では判読できず、安永図[4)]では完全に巷所化している模様である。

(7)防火線に関する考察は、内藤「江戸と江戸城」[21)]や渡辺論文[9)]においてもなされている。

(8)表－２で示す広場的空間の特性の分類は、緑型－中央型、町人地内中央型－小規模区画武家地内中央型はそれぞれ背反な類型であるが、緑型の下位の分類の多くは互いに背反でない属性であり、特に、見附型は必ず橋詰型、橋詰型は必ず水際型であるといった関係が成立している。

(9)江戸名所図絵より抽出された20箇所の広場的空間を下記に列挙する。括弧内はその広場的空間が有するフィジカルな特性（表－２の分類）を示す。ただし(8)で述べたように見附型は橋詰型・水際型、橋詰型は水際型といった属性が必ず付随するので、それらは省略した。

1.常盤橋御門内（見附内型）
2.常盤橋御門外（見附外型、重要機関付随型）
3.神田筋違橋御門内（見附内型、用途境界型）
4.神田筋違橋御門外（見附外型、用途境界型）
5.呉服橋御門内（見附内型）
6.呉服橋御門外（見附外型、用途境界型）
7.采女ヶ原（用途境界型）
8.馬喰町馬場（用途境界型・重要機関付随型）
9.御原堤（河岸型）
10.護持院ヶ原（見附外型）
11.溜池畔（用途境界型・河岸型）
12.増上寺門前（用途境界型・重要建造物付随型）
13.浅草門前（用途境界型・重要建造物付随型）
14.下谷広小路（用途境界型・重要建造物付随型）
15.山下広小路（用途境界型）
16.日本橋橋詰（橋詰型）
17.両国広小路（橋詰型）
18.新大橋広小路（橋詰型）
19.永代橋広小路（橋詰型）
20.江戸橋広小路（橋詰型）

(10)根無草には、両国広小路では群集する多様な階層の人々の様子がよく描写されている。一方の市井年表には両国広小路・浅草雷門前広小路・山下広小路等の広場的空間における催し物等が多数記載されている。

《使用した絵図》

1)武州豊島郡江戸之庄図，1630；江戸図の歴史（口絵3）より引用
2)明暦江戸大絵図，1657，（略称明暦図とする）；地図資料編纂会，江戸－東京市街地図集成，柏書房，1988
3)新板江戸大絵図，1670～73，（略称寛文図とする）；同上
4)分間江戸大絵図完、安永板，1779，（略称安永図とする）；同上
5)分間江戸大絵図完、安政板，1859，（略称安政図とする）；同上
6)明治東京全図，1876，（略称明治5年図とする）；同上
7)江戸切絵図吉文字屋板，1716～55；斎藤 直哉，江戸切絵図集成，中央口論社，1981
8)江戸切絵図近江屋板，1846～56;同上
9)江戸切絵図尾張屋板，1849～70；同上

《主要参考文献》

10)渡辺　達三，火除地広場の成立と展開に関する研究（Ⅰ）・（Ⅱ），造園雑誌36.1，1973，pp13-22，および，36.2,pp27-34，1973
11)加藤　晃規，場所的広場の成立と展開に関する比較都市論的考察，大阪大学　学位論文，特にpp317-336，1985
12)鳴海　邦碩，都市における自由空間の研究，京都大学学位論文，特にpp92-111，1978
13)斎藤　月岑，江戸名所図絵，1836；池田ほか，日本名所風俗図会3，角川書店，1979
14)金永　陳人，絵本江戸土産，1850～57；池田ほか，日本風俗名所図会4，角川書店，1980
15)浅井　了意，江戸名所記，1836，同上
16)芋斎　道人，江戸名所花暦，1827，同上
17)平賀　源内，根無草，1763；西山松之助，大江戸の文化21)より
18)都市デザイン研究体，日本の広場，建築雑誌，建築文化VOL.298，1971
19)伊藤　好一，江戸の町かど，平凡社，1986，pp6-47など
20)玉井　哲夫，江戸－失われた都市空間を読む，平凡社，1986，pp6-47など
21)西山　松之助，大江戸の文化，日本放送協会，1981，pp146-148など
21)東京市史稿，市街編・変災編
22)石川　栄耀，「市井年表」，皇国都市の復興，1942
23)内藤　昌，江戸と江戸城，鹿島出版会，1966
24)飯田　龍一・俵　元章，江戸図の歴史，pp23-179および口絵